

とうとう最後になりました。このプリントは、最初は哲学史の授業の足りなかった部分を補いたいと思って始めたのですが、途中で挫折。その後、キリスト教のもとになる福音書が歴史研究にも耐えうる書物であることを説明することに方向転換しました。どちらにしても、目的は世界や人生の意味といった問題を考える際の手がかりを与えること、でした。極めて不十分なことしかできなかったのが残念です。ともかく、社会に出たら様々な問題に遭遇すると思いますが、よければまた話しに来て下さい。そのときにはゆっくり徹底的に話すことができるでしょう。

さて、今回はイエスの処刑の経過を見ました。しかし、問題はその後起こったことでした。つまり、イエスの処刑で落胆絶望した弟子たちは、あらゆる予想に反して、ナザレのイエスが三日目に蘇り、神の子であり、ユダヤ人が昔から待ち望んできたメシア（もともとは「油を注がれた者」という意味のヘブライ語ですが、「救い主」という意味になりました。メシアをギリシア語にするとキリストになります）であることを示したと主張し始めたのです。この主張は、ユダヤ人の指導者たちを憤慨させ、彼らはこの弟子たちの運動を阻止しようとしたが、この共同体は迫害を乗り越えて成長し、ローマ帝国内と中近東やインドまで広がり、教会を組織し、現代も存続しているのです。

聖書以外の書物にも、例えば紀元49年にローマ皇帝クラウディウスが「キリストの扇動によって絶えず騒動を巻き起こしていたユダヤ人をローマから追放した」という記録があります。これは49年にはすでに無視できない数のキリスト教徒がいて、ユダヤ人との間に騒動があったことを示しています。

紀元64年頃にはローマに「キリスト信奉者」がいて、皇帝ネロは自分が犯人だといわれるのを恐れ、大火事の責任を彼らに負わせたことがわかっています。またローマ帝国で最大の版図を獲得したトラヤヌス帝（『テルマエ・ロマエ』のハドリアヌス帝は彼の後継者）の治世、今のトルコの黒海沿岸にビテュニア州という州の総督が次のような報告を皇帝に送っています。「彼ら（キリスト教徒たち）は一定の日（日曜日のこと）に明るくなる前に集まり（日曜日は休日ではなかったため、後で仕事に行くため早朝に集まった）、神に対するのと同様にキリストに対して一定の形式の祈りを捧げ、（下略）」と。つまり、イエスを神として崇めていたのです。

このような記録は、キリスト教が紀元100年頃にローマ帝国の広い範囲に広まっていたことを教えます。上に挙げた報告書はキリスト教もユダヤ教にも興味のないローマ人の記録ですが、新約聖書にはキリスト教がかなり早い時代から活動していたことがもっと詳しく記録されています。

50年代に書かれたパウロの手紙を読むと、すでに同じ信仰があったことがはっきりわかります。パウロの手紙の一番古いものである『テサロニケへの手紙』（51か52年）はこう結ばれています。「私たちの主イエス・キリストの恵みがあなた方とともにありますように」と。主 **Dominus** とは神を指し、恵みは神だけが与えることができるものです。これはほんの一例にすぎません。では、なぜ十字架で処刑された人が神として崇められるようになったのでしょうか。

不思議なことは、イエスの最初の弟子たちは人間的には英雄豪傑でも博識な学者でもない人々で、それがどうして、ユダヤ人の有力者たちから処刑された人物を持ち上げて、新しい宗教を世界中に広めるというような大胆な行動ができるようになったのでしょうか。

それがキリストの復活という信仰以外に考えられません。キリスト教の土台はイエスが神である（正確に言うと、神の第二のペルソナが人間の本性をとった）という信仰です。これはこの上なく奇

妙な信仰です。預言者とか悟りを開いた人間というのなら理解できますが、神が人になったとは普通では信じられないことでしょう。では、どうしてそのようなとてつもない信仰が生まれたのでしょうか。単に数人の人に信じられて、その後消滅してしまったなら理解できますが、その後多くの人に信じられたのは不思議ではないでしょうか。その最大の証拠が復活という奇跡だというのがキリスト教の主張です。



だからこそ、キリスト教を否定しようとする人たちは、いつもこの復活の信仰を攻撃します。ユダヤ人たちは弟子たちが死体を盗んでイエスが復活したと言いふらしたという説を広めました。その後18世紀になって、理性で理解できないものはすべて否定するという合理論が生まれます。その人たちは復活はなかったのにどうして復活の信仰が広まったのかを説明しようと努力します。ある人は弟子たちが幻を見たのだ（幻視説）とし、ある人は「キリストは死んでいなかったが、墓に納められたとき、冷たい空気に触れて目を覚ました」（仮死説。これを提案したのはパウルスという有名な学者です）とか、あるいは比較宗教学を使って、神々が復活するという信仰はエジプトやシリアなどの周辺の宗教にあり、それから影響を受けたという説明などをこしらえました。また復活ということ自体を肉体の復活ではなく、弟子たちの心にイエスが復活したのだと主張した人たちもいました。

古代の人は自然科学がまだ発達していなかったのでこういう奇跡を簡単に信じるのができた、と考える人がいるかも知れません。新約聖書には、初代の信者だけでなく弟子たちも、いかに復活を信じるのが難しかったかが語られています。

特にギリシア人にとって難しかったようです。パウロがアテネで町の知識人たちが集まったアレオパゴスで理路整然とキリスト教の説明をしたとき、途中まで静かに聞いていた人々は「死者の復活ということを知ると、ある者たちはあざ笑い、ある者たちは『そのことはまた後で聞こう』と言った」（使徒言行録、17,32）。つまり演説は大失敗に終わったのです。またコリントの町の信者にパウロはこう書いています。「キリストが復活しなかったとしたら、わたしたちの宣教は無意味なものであり、あなたがたの信仰も無意味となるでしょう。それどころかわたしたちは神について偽証した者ということになります。なぜなら、神に誓って神がキリストをよみがえらせたことを証明したからである」（前コリント、15,12~15）。

できればもっとこの話しを続けたいのですが、時間がなくなってきました。もし興味があれば、ちょっと難しいですが、岩下壮一、『カトリックの信仰』講談社学術文庫などを読んで下さい。（岩下神父は、大阪の財閥岩下清周の子供で東大の文学部をトップで卒業した（金時計をもらった）人で、後にフランスに留学し司祭になって帰国し、日本の知識人を相手にキリスト教を説明した人です。後に富士山麓にあるハンセン病のための神山復生病院で働き、1940年51歳でなくなった人です）。

キリスト教は神が人間に付き添われ、人間の歴史に介入されたと信じます。これは本当かどうかを調べる価値がある主張ではないでしょうか。もし嘘なら、何も変わらない。だが、もし本当なら世界観、人生観はまったく変わってしまうので。

その第一歩として、もし実際にイエスが復活しなかったのに、その直後から復活の信仰が生まれたのなら、その間にどういうことが起こったのか、試験が終わったら頭をリフレッシュして健全な常識をもって少し考えてみて下さい。では、お元気で。

